

「F.A.ハイエク¹の主観主義について～G.L.S.シャックル²との対比から」

吉野 裕介^{*}

かつてハイエクは経済学方法論に関する論文集『科学による反革命』のなかで「経済理論の過去 100 年間の重要な進歩は、ことごとく主観主義の一貫した適用による前進であったといってもおそらく過言ではないだろう」[Hayek, 1952, 邦訳 p.30], と述べた。実際に、ハイエク自身の経済学において主観主義は、その基礎として重要な位置をしめている。

ハイエクが後期に展開した社会理論は、自生的秩序、文化的進化といったユニークな概念を用いて説明されるものであるが、これはハイエク流の自由主義の擁護のために導入されたものであった。ところが、その活動が後期になるにつれ、初期のような方法論的個人主義が前面に出た主張は影を潜め、特に 1973,76,79 年の『法と立法と自由』以降顕著にみられるのは、集団主義的な方法論である。

ハイエクのなかに本来なら相反する方法論が混在しているという矛盾は、これまでもよく取り上げられてきたテーマであった³。近年では、特に進化論との関わりで、個体発生と系統発生との矛盾として置き換えられ、議論されているようである⁴。しかし、そもそもハイエクはどの程度まで方法論的個人主義者であったのか、すなわち「移行前」のハイエクがどのような方法論を前提としていたのかについて、未だ決着がついていない⁵。言い換えれば、それだけハイエクの主観主義が複雑なものであるということでもあろう。

一方、シャックルもまた、主観主義をその基礎として独自の経済学を展開させた学者である。かれはハイエクを指導教官として研究を始めたが、後にケインズ理論に傾倒していくため、オーストリアンの一人として評価されない場合がある⁶。しかし、ラッハマ

¹ Friedrich August von Hayek, 1899-1992.

² George Lennox Sharman Shackle, 1903-1992.

^{*} 京都大学大学院経済学研究科博士課程, e-mail : yusuke-y@ijk.com.

³ Vanberg, 1986 ; Hodgson, 1993 ; Witt, 1993.

⁴ Hodgson, 2003, 2004 ; Caldwell, 2004.

⁵ このハイエクの「転換」問題に関しては、前期のハイエクが、ミーゼス流のアプリオリズムを置いていて、そこから離れていったとする Hutchison[1981] の意見と、これに対する反論としてハイエクがアプリオリズムをおいていたことは前期においてもない、とする Caldwell[1988,2004]らの意見などがある。近年、ハイエクの包括的な学説史的な研究が進むにつれ、前期ハイエクの方法論についてもスポットがあたるようになってきた。本稿の問題意識も、そういった流れに沿うものである。

⁶ 例えば、「急進的主観主義とは、主観主義の『主観』性を根源的なものとして捉え、市場プロセスの不確実性や不均衡的性格をいっそう強調する立場のことをいう。この立場を代表するのは、G.L.S.シャックルと L.ラックマンであり、このうちオーストリア学派に属するのはラックマンで

ン[1986]が言うように、主観主義がオーストリアンの本質的な特徴と看做せるならば、シャックルもまたオーストリア的な要素を備えていたと言えよう⁷。

後に主観主義の発展の歴史を描写したラッハマンは、ハイエクを、1930年代、ミーゼスとともに経済理論に予想の主観性を導入したとして評価する[Lachman, 1990, p.5]。ただし、ハイエクの主観主義については、自らの景気循環論や資本理論を展開するうえでの恣意的な導入であったため、不完全であるとする。ミーゼス、ハイエクらにみられるこの段階の主観主義をラッハマンは「目的と手段に関する主観主義」と称する。そして次の段階の主観主義として、想像や予想を導入したシャックルが登場し、ラッハマンはそれを「精神の主観主義」と呼び、主観主義の新たな段階をそこにみる[Lachman, 1990, p.6]。

本稿では、ハイエクの主観主義がどのようなものであるか明らかにするために、シャックルと比較する。まず、ハイエクの主観主義について吟味するが、本稿ではこれを、知識に関する問題ととらえ、かれの知識論を検討し、それをベースにしたかれの独自の秩序論も考察する。次にシャックルの主観主義について見ていくが、かれの理論のなかでは、個人が自らの行動を決定する際に、いかに決定をくださかという問題を検討することで、これが明らかになると考える。その後で、ハイエクの主観主義とシャックルのそれが、どのような違いがあるかを検討する。もし、ハイエクの主観主義が、ラッハマンの言う意味で不十分なものとするなら、それを乗り越えて展開されたとするシャックルの主観主義はどんな優位性があるのだろうか。

1. ハイエクの主観主義

1.1.知識論

そもそも、知識とは何であるか。ハイエクの言葉によればそれは、「人々の行為を導く」[Hayek, 1952, p.28]のものである。ハイエクは、個人の有する知識と、それを観察する社会科学者の有する知識をどのようなものであるかを明らかにした。言い換えると、行為者の知識と観察者の知識とを峻別し、それぞれについてその性質を明らかにしたのである。

まずハイエクは、個人の有する知識、つまり行為者の知識とは、断片的かつ局所的なものにすぎないとみなしている。「あらゆる知識が断片的で不完全であるという、こうした基本的事実の一つから社会科学は出発しなくてはならない」[Hayek, 1952, 邦訳

ある」[尾近・橋本, 2003, p.258]。

⁷ シャックル研究はハイエク研究に比べて数は少ない。日本においては、林[1967;1970]や依田[1997]があるが、前者は1970年代以前のシャックルを取り上げたもので、後者はケインジアン的な理解を基礎としている。

p.28]。知識は、「決して統合された全体として存在もしなければ、単一の意識のなかにも存在しない」[Hayek, 1952, 邦訳 p.65]のである。このように個人の有する知識は、市場で合理的にふるまうには不完全である。このため、ミーゼスのような人間の行為はすべて合理的であるとするアプリオリズムとは異なる。またハイエクは個人の有する知識の限定性を前提におくので、原理から正確な結果を予測することはできないとみなす。そこで人間に出来るのは、「ある現象を生み出す原理の単なる説明」である抽象的な原理説明だけであって、「正確な結果を予言しうるような説明」すなわち具体的な結果予測ではない[Hayek, 1952, 邦訳 p.48]。

そして個人の知識の主観性についてハイエクは、外部世界とその認識との関わりで、こう述べている。「意識的な [意思] 決定に際して人間は外部的刺激を分類するのだが、われわれは自分自身の主観的な経験だけから知られる仕方でもって、この種の分類を行う」[Hayek, 1952, p.23, 下線筆者]。個人的な行為に関する限り、個人の知識を正当化する際の根拠は、主観的な経験によるのである。

一方、社会科学で扱う知識とは、社会科学者の解釈というフィルターを通して認識されるから、常に主観性を帯びており、自然科学が扱うような厳然たる事実とは区別されなければならない。「社会科学では、与えられた精神的存在が出发点」であり、「人間行為の解釈にあたっては、… (主観的な行為としての) 分類が用いられなければならない」[前掲, p.62]し、「実際の大部分の社会的分類、または人間行為の対象は、狭義の (自然科学で扱うような) 『客観的事実』ではない」[前掲, p.24]。そのため経済学は自然科学のようなやり方では追求できない。

それならば、われわれが観察でき、研究できるのはどのような類の事柄であるのか。ハイエクはそれを、主観的な性質を持った人間の知識は、人間自身のみのもので研究できるので、人間が歴史的過程を経て生み出してきた諸結果を考察することだとする。「人間の行為に関わる限り、行為する人間がそう考えるものが事物なのである」[前掲, p.24]り、「社会は言うなれば、人々が抱いている概念とか観念によって作り上げられている」[前掲, p.34]。人類の共通の知識たる社会科学は、人々が考えていることを前提に発展があるのである。「…人々の間のあらゆる関係そしてあらゆる社会制度もまた、それらについて人々が考えていることによるのみ理解できるのである」[前掲, p.34]。

このように、個人的知識に関して、アプリオリズムを導入せず、先験的には人間の知識は不完全と捉え、行為の選択の際には原理原則を説明できるのみであるとする知見と、社会科学における知識についての、人間行動の結果を観察しようとする態度は、人間の持つ知識が、常に主観的であるという前提から始まっている。このことは、次にみるように、かれの秩序論の重要な基礎となっている。

1.2 秩序論

ハイエク体系において、人は常に「生まれつきの無知」すなわち人間の知識の性質

が、常に不完全であると想定されている。では、そこで個人は行動する際にどのように指針を得て、行動を決定しているのか。ハイエクはそれを、「自生的秩序」が解決を与えているとする。自生的秩序とは、「自然」の産物でも「人為」による設計物でもなく、歴史的過程を経るなかで意図せずして発生したシステムのことである。これについて再び、個人と社会科学者の観点との両方からみていこう。

まず、個人と秩序の関係である。自生的秩序内部には、歴史的な過程を経て残ってきたルールが存在し、そこには過去の行動から得てきた知識が蓄積されている。人々はそれが意識的か無意識的に関わらず、そのようなルールに従うことによって行動の不確実性を減じ、行動についての将来の指針を得ることで、知識を補完し、無知に対処している。「ルールは、われわれが生まれながらにして持つ無知に対処するための手立てである[Hayek, 1976, p.17]」し、また「自生的秩序を維持する際に抽象的ルールに頼る必要があるのは、無知と不確実性の結果である」[Hayek, 1976, p.177]。また、ルールに従う行動をとるためには、人々が自由な状態にある、すなわち強制から免れていることが重要であるので、自由な行為を所有権に基づいて保証する法の存在は不可欠である。そして、自生的秩序のもとで人々が自由に行動できれば、「見えざる手」がはたらき、望ましい結果を得ることができる。すなわち調和の状態が生まれる。

またハイエクは、社会科学者が観察すべき対象に関しても、自生的秩序の重要性を述べる。自然科学のように「明確な事物または事物の集まりをあらわすものでなく」、「さまざまな事物が相互に関連し合うある型、秩序」[Hayek, 1952, p.72]を取り扱うのが社会科学である。そしてそのような諸関係の特別な結びつきに関する観察は、社会科学者の解釈を通じてなされる。それゆえ、「自然科学的客観主義は、これら社会構成体を外部から眺めようとする」のに対し、社会科学は、「観察者は、人々の感覚なり意識が、それらにとっての外部世界を想い描く仕方を十分詳細に再構成すること」[Hayek, 1952, p.78]で社会を内部から眺めようとする。このような「多数の個人の個別的行为の意図せざる結果」を説明する理論を、ハイエクは「構成的」理論と呼んでいる[Hayek, 1952, p.78]。

このように、ハイエクの秩序論においては、自生的秩序が個人の主観的知識の限界を補完するシステムととらえられており、また秩序は社会科学者の主観的観察によって説明されるべきだとみなされている。それは、かれの主観主義から導かれたものである。

2. シャックルの主観主義

2.1 時間

シャックルの社会理論は、人間行動一般の決定がどうなされるかについて、経済学の観点から説明を与えたものである。たとえば、「この本においてわれわれは、決定に関

する一般理論を与えるよう努力してきたが、われわれは、経済学的な例からこれを描写した」[Shackle, 1961, p.274]。そのような行動の決定理論とは、時間、想像、決定といったかれ独自の概念を用いて展開されており、かれの主観主義がベースとなっている。まず、時間概念からみていこう。

時間とは本来、人々の解釈を通じて存在する。それは、二点以上の異なる点として存在することはできず、ただひとつ、現時点が存在するのみである[Shackle, 1962, p.42]。行動を起こす人間が存在できるのは、この現時点においてである。ある人が現時点で行動の決定をすることはできても、過去、もしくは未来においてその決定を行うことはできない。当然、過去を振り返ったり、未来を考えることはできる。しかし、それらはどちらも現時点での個人のうちに保有されている観念である。言い換えれば、過去や未来は、記憶や予想のかたちで、個人の解釈を通じて存在しているのみである。「われわれが知っていることは、思想であり、そして思想とは、現在である」[Shackle, 1979, p.2]。現時点は、ただ一点しか存在しないが、時間が流れれば、未来のある一点が今度は現時点になる。「『現時点』はつねに独特であり明確であるが、常に前へと進んでいくように展開している」[Shackle, 1958, p.16]。その刻々と変わる状況にあつてある一点で、ある人間が予想にもとづいて行動を起こすことで過去と未来を分断する。未来を見ているのは、常に現在の人間であるから、未来はその人間が主観的にクリエイトするものであると考えられる。ここで、個人の行動に関して、個人が未来をクリエイトする存在であることと、行動に際して前もって個人が予想(expectation)をするということが、密接に関わっている。

2.2 予想と決定

シャックルの時間概念によれば、現時点における個人の解釈の中に、過去と未来が記憶と予想のかたちで存在している。それでは、未来に向けて行動を行う個人は、どのように予想をし、行動を決定しているのか。

まず、シャックルは未来の行動の予想を立てる際に、人間の持つ想像という能力を重視する。「現在としての時間は、来たるべき時間のあり得る内容をもたらすことに関連している。これは想像のはたらきである」[Shackle, 1979, p.9]。ここでいう想像とは、取るべき行動に対し、持てる理性をすべて使って情報を集めて判断し、予想をする能力のことをいい、単なる幻想(fantasy)とは異なる。個人は、起こりそうな出来事に関して、この想像のはたらきによって選択肢（シャックルの言うところの action-scheme）を集めるのである。

ここで選択とは、互いに排他的であり、一つを選んでしまえば他を選ぶことはできない。これは、行動するのは現時点ただ一点のみであり、時間は異なる点に同時に存在することはできないというシャックルの主観的な時間概念から導かれる。考えられうる action-scheme を人間の持つ想像というはたらきを最大限利用して収集した後、実際の

決定はどのように行われるか。ここでシャックルは個人の知識が完全であり、結果が必然的に規定されているのであれば、決定の問題は起こらないとする。しかし、逆に未来の出来事に関して何事も知りえないという状況は、決定が無限定(unbounded)なものになるので、これもまた無意味である。シャックルにおける決定とは、「限定せられた不確実性に直面した選択」[Shackle, 1961]なのである。

考えられうる選択肢のうち、行動主体は、起こりそうな出来事の一番良い結果と悪い結果を予想する。このシャックルの言う対抗的選択肢は、その行動をとったときに得られる驚きをどの程度含んでいるか、という尺度(シャックルの擁護で Potential Surprise)によって表される[Shackle, 1979, p.11]。起こりえないと予想していたことが実際に起こったときは、それだけ驚きが大きく、かなりの程度で起こると予想していたことが起きても、驚きはそう大きくはないのである。そして、もう一つの決定基準は、どの程度シャックルの言う精神のよい状態(good state of mind)をもたらすかという望ましさの度合い(desirability)である。ある個人のとる行動は、good state of mind がもたらされることを目的とし、また Potential Surprise と desirability との勘案でどの action-scheme が取られるかが決定される。

シャックルは、需要と供給や、効用や予算制約といった概念を用いた経済分析を拒否し、独自の経済理論を組み立てた。これは、個人の主観的な意思決定から、取るべき行動が決定できるとした理論であり、急進的主観主義と称されるものである。シャックル理論は、かれ特有の用語を導入し説明されており、非常にユニークなものであるが、意思決定の構造が詳細に検討され、頑丈に構築されていることがその特徴としてあげることができよう。

3. 両者の比較

このように、ハイエクとシャックルの理論は、共に主観主義をベースとしており、新古典派的な決定論に対抗し、非決定論をとっていることでも共通している。しかし、その論理の組み立てや扱う対象には若干の違いがあることがわかる。そして、かれらに対する批判も存在する。以下にこれらを吟味していこう。

まずハイエクの主観主義的方法は、個人的知識が自生的秩序によって補完されることを説明したものである。ただしそこから引き出しうることは、個人の有する主観的な知識と、別の個人が有する主観的な知識が、自生的秩序によって適切に調整されるということにとどまり、個人間の利害の調整が秩序内で実際にどのように行われるのか、もしくはなぜ自生的秩序には調和がもたらされるのか、という肝心のメカニズムについての記述は見られない。ハイエクが初期の論文「経済学と知識」[Hayek, 1936]において取り組むべき問題であると述べた、個人間の知識の調整問題⁸については、後期の著作『自

⁸ 「(社会科学の) 中心的問題というのは、様々な人々の考え方の中に存在する知識の断片を組み

由の条件』や『法と立法と自由』において、自生的秩序概念を導入することで、一応の解決の方法を示したと言える⁹。しかしこれは、個人間の知識の調整が結果的にはうまくいくということを述べたに過ぎないし、最終的にはハイエクの市場に対する信頼を担保にしか成立しない。示されなければならないことは、市場に対する信頼を前もって置かずに、個人間の知識の調整のみならず、社会総体がどのように成長していくのかについて、曖昧でなく明確な記述を与えること、であっただろう¹⁰。

またハイエクは、自生的秩序と進化を「双子の観念」として自らの社会理論のキーコンセプトとして置いている[Hayek, 1967, p.77]。ところが、進化概念を導入したことで、進化過程を経て残ったものに対して正統性を与えることには成功していると言えるが、どのようにして意図せざる自生的秩序が生まれるのかということをはっきりと説明できていないという結果を招いてしまった。かれ自身、生き残ったものがすべて「良い」ものであるという主張はしていない¹¹。しかし、歴史や伝統に重きを置くハイエクの態度は、保守主義者とも言われかねないものである。そしてそれは、果たしてハイエクの主観主義と、両立するのであろうか。

一方シャックルは、個人による「現在の認識」から、かれが行動をどのように決定するのか、という問題設定に対し、一貫して主観的な方法によって記述を試みている。かれの理論もハイエクのように、人間の持つ知識が前もって完全であるとする前提を取らず、不完全であるという認識から始まっている。しかしハイエクにおける自生的秩序のように、その解決を外部のシステムに求めたりはしない。シャックルの主観主義によれば、個人が決定することは個人によって決定されるのである。ただしこのような立論については、すぐさま同義反復的であるという反論がなされるであろう[Koppl, 2001]。確かに、結果を達成するための手段を考量するのは、結果を考量してからであるという論理は、何も語ったことにはならない。それゆえ、個人の決定できることが実は何も無いのではないかというニヒリスティックな反論も免れえない。

合わせたものが、もしその結果を意図的に実現しようとするのであれば、指令を発する人の側に実はいかなる個人も持つことの出来ないような知識を必要とするものである、そのような結果をどうして実現できるのかということである」[Hayek, 1936, 邦訳 p.70]。

⁹ ただし、秩序に関する記述は『科学による反革命』[Hayek, 1952]にもみられるし、自生的な形成物というアイデア自体はメンガーに影響を受けたものであるので、以前からハイエクはその存在を意識していたと考えられよう。

¹⁰ それはシャックルも言うように、自由を先験的な価値と置かず、自由擁護論を組み立てることとも関わっていると考えられる。「ハイエクは、…経済学者の領域をはるかに超えており、『自由の体制』や『法、立法および自由』というような後期の大作において、自由と言う理念自体その不可欠な基礎を自由の本質の中に求めている」[Shackle, 1981, 邦訳 p.282]。ただし、その試みが成功したかどうかに関しては、批判的な意見が多い（例えばグレイ[1986]）。

¹¹ 「わたくしは、伝統(traditions)の集団選択の結果が必然的に良いものであるとは主張しない。まして、ゴキブリのような進化過程で長く生き残ったものが道徳的価値を持つなどと主張するつもりはない」[Hayek, 1988, p.28]。

また、シャックルの理論では、ハイエクが述べたような意味での個人の知識と別の個人の知識がどのように調整されるのか、という問題や、全体としての秩序がどのように形成されるのか、といったことに答えることは難しい。シャックルは、あくまで個人の意思決定がどのように行われるのか、といったことに興味があり、社会システム総体がどのようなものであるか、もしくはどう変化していくのか、ということに対しては、目を瞑っているようである。そのため（オーストリア学派の主観主義的方法は）「多数の人間が相互に関係を持ちながら（世代交代を含めて）生き続けると言う社会的再生産のなかに組み入れなければ、同義反復的なアプリオリズムを脱することはできない」[八木, 2004a, p.68], という指摘に対し、シャックルは反論することができないであろう¹²。

ところで、オーストリア学派の特徴として、主観的方法があげられることは前に述べた。ここでいま一つあげられる特徴として、プロセス分析をあげることができよう。ハイエクの理論の中にも、それに対する考察がある¹³[Hayek, 1945 ; 1978]。ハイエクによれば、個人の知識の補完は、競争することで可能になる。市場に散在する知識は、競争することによって諸個人によって発見され、有効に利用されるのである。また別の意味で、市場が優れているのは、そこに先人達のトライアルアンドエラーによる知識が蓄積しており、現在行動を起こす諸個人が意図せざるうちにその知識が利用できるからである。しかし、決定が一時的であるシャックルの理論においては、プロセス分析すなわちある行為の結果が次の行為に影響を与え、その結果がまた次の行為に影響を与える…というような議論は出てこない。シャックルのような急進的主観主義をプロセス分析に取り込むには、ラッハマンの登場を待たなければならなかった。「主観主義の拡張の歴史」（ラッハマン）という観点から言えば、シャックルは確実にハイエクの次のステージへ進んでいたと言える。しかし、かれの行動決定理論が、独特であり拡張性に乏しいこと、またプロセス分析に欠けていることは、ネオ・オーストリアンがかれをラッハマンほどにはとりあげない理由として考えられよう。

一方、ハイエクが置いている主観主義は、シャックルと比べて穏健的主観主義ともいえるものである。かれの理論は、人間の行動がすべて主観的に自ら決定できると考えるのではなく、意図的ではないにしろ、自生的秩序に行為のガイドを求め、また個人間の行為の調整についても、それが解決を与えるとする。そのためシャックルと比べて個人の行動の決定理論と読むには、その主張には曖昧さが残り、このことがまた、ハイエク

¹² もちろん、シャックルは行動決定理論のみを扱ったわけではない。投資行動に関する分析や、景気循環に関する意見も述べている[Shackle, 1990]。しかし、いずれも個人行動に焦点を当てるのみであり、社会総体に関する関心が、ハイエクと比べて薄いことは指摘しても許されるであろう。

¹³ “meaning of competition”, in Hayek, 1945 ; “ Competition as a Discovery Procedure”, in Hayek, 1978.

批判を呼ぶ。しかし、ハイエクがラディカルな主観主義をとらなかったことは、一方で、アプリオリズムと経験的方法を統合する一つの可能性を示していると言えないだろうか。ハイエクは長年、反設計主義の文脈で読まれることが多かった。また冷戦構造が崩壊した後のここ最近の議論では、自由主義の文脈から離れて、社会科学へ進化論を導入しようとしたかれの試みを評価し、社会の一般理論を提供した人物として再評価する動きがある¹⁴。ここで、ハイエクの主観主義を評価し、認識論上の流れに位置づけようと試みすることは、知識が主観的か客観的か、もしくは先験的か経験的かといった単純な二項対立に新たな材料を提供しているのではないか。経済学者としての前期ハイエクと、社会哲学者としての後期ハイエクとの橋渡しの新たな可能性として、このような態度が考えられるであろう。

参考文献

- Birner, J. and Zijp, R.(eds.)(1994)Hayek, Co-ordination and Evolution-His Legacy in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas-, London : Routledge.
- Caldwell, B.J. (2003)*Hayek's Challenge*, Chicago university press.
- Hayek,F.A.(1936) “Economics and Knowledge” , in Hayek[1948], pp.33-56.
- (1943) “The Facts of the Social Sciences” , in Hayek[1948], pp.57-76.
- (1945) “The Use of Knowledge in Society” , in Hayek[1948], pp.77-91.
- (1946) “The Meanings of Competition” , in Hayek[1948],pp.92-106.
- (1948)*Individualism and Economic Order*, London : Routledge & Kegan Paul,1949 (嘉治元郎・嘉治佐代 訳『ハイエク全集 3 個人主義と経済秩序』, 春秋社,1990) .
- (1952)*The Counter Revolution Of Science : Studies on the Abuse of Reason*, Glencoe Illinois, Free Press(佐藤茂行訳『科学による反革命』,木鐸社,1979).
- (1960)*The Constitution of Liberty*, University of Chicago Press (気賀健三・古賀勝次郎訳『ハイエク全集 5,6,7 自由の条件』春秋社, 1986,1987,1987) .
- (1967)*Studies in Philosophy, Politics, and Economics*, London : Routledge & Kegan Paul.
- (1973)*Law, Legislation, and Liberty, Vol.1: Rules and Order*, London : Routledge & Kegan Paul (矢島鈞次・水吉俊彦 訳『ハイエク全集 8 法と立法と自由 1:ルー

¹⁴ 例えば、江頭[1999]。

- ルと秩序』,春秋社,1987) .
- (1976)*Law, Legislation, and Liberty, Vol.2: The Mirage of Social Justice*, London : Routledge & Kegan Paul (篠塚慎悟訳 『ハイエク全集 9 法と立法と自由 2:社会主義の幻想』,春秋社,1987) .
- (1978)*New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, London : Routledge & Kegan Paul.
- (1979)*Law, Legislation, and Liberty, vol.2: The Political Order of a Free People*, London : Routledge & Kegan Paul(渡部茂訳 『ハイエク全集 10 法と立法と自由 3:自由人の政治的秩序』,春秋社,1988).
- (1988)*Fatal Conceit : The Errors of Socialism, The Collected Works of Friedrich August Hayek, vol.1*, London : Routledge.
- Hodgson, G.M (1993), *Economics and Evolution-bringing life into economics-*, Polity press.西部 忠, 森岡 真史, 田中 英明, 吉川 英治, 江頭 進訳 『進化と経済学—経済学に生命を取り戻す』, 東洋経済新報社, 2003 年。
- Hutchison, T.W. (1981) *The Politics and Philosophy of Economics : Marxians and Keynesians, and Austrians*, Blackwell, Oxford.
- Koppl, R.(2001)“Alfred Schuetz and George Shackle : Two Views of Choice”, *The Review of Austrian Economics*, vol.14 : 2/3, Kluwer Academic Publishers.
- Lachman, L.M. (1976) “From Mises to Shackle”, *Journal of Economic Literature*, vol.18, March.
- (1986) *The market as an Economic Process*. Oxford : Basil Blackwell.
- (1990)“G.L.S Shackle's Place in the History of Subjectivist Thought”, in Frown, *Unknowledge and Choice in Economics*.
- Parsons, S.D. (1991) “Time, expectations and subjectivism”, *Cambridge Journal of Economics*, vol.15, pp.405-23.
- Shackle, G.L.S. (1952)*Expectation in economics*, Cambridge : University Press.
- (1958)*Time in Economics*, Amsterdam : North-Holland.
- (1969)*Decision, order, and time in human affairs*, Cambridge : Cambridge University Press.
- (1979)*Imagination and the nature of choice*, Edinburgh : Edinburgh University Press.
- (1981)“Hayek as Economist”, in O'Brien and Presley, J.R. (eds.) *pioneers of Modern Economics in Britain*, pp.234-61, London, 1981 (八木紀一郎訳「F. A. ハイエク 1899-」『近代経済学の開拓者』D.P.オブライエン、R.プレスリー編, 昭和堂, 1986 年。) .
- (1990) *Time, expectations and uncertainty in economics : selected essays of*

- G.L.S. Shackle*, edited by J.L. Ford.
- “Economics Expectation”, in *International Encyclopedia of the Social Sciences*, vol. V, New York : Macmillan and Free Press.
- Vanberg, V. (1986) “Spontaneous Market Order and Social Rules : Critical Examination of F.A.Hayek's Theory of Cultural Evolution” , *Economics and Philosophy*, vol.2, April, pp.75-100 (石山文彦訳「自生的市場秩序と社会の諸ルール—F.A.ハイエクの文化の進化論の批判的検討」『現代思想』1991年12月号) .
- Witt,U(1994) “The Theory of Societal Evolution : Hayek's Unfinished Legacy” , in Birner and Zijp(eds.)(1994), pp.178-89.
- 江頭進(1999)『F.A.ハイエクの研究』日本経済評論社。
- 林治一(1966)『オーストリア学派研究序説』, 有斐閣。
- (1967) 「シャックル体系における経済的決意基準」, 甲南経済学論集, vol.8(1-2), pp.51-75。
- (1970) 「シャックルの体系的基礎」, 国民経済雑誌, vol.122, pp.35-55。
- 依田高典(1997) 「不確実性下の意思決定理論の批判的展望--シャックル理論と期待効用理論の比較的検討を通じて」, 甲南経済学論集, vol.37(4), pp. 475-495。
- 尾近裕幸・橋本努編『オーストリア学派の経済学』, 日本経済評論社。
- 八木紀一郎(1988)『オーストリア経済思想史研究』名古屋大学出版会。
- (2004a) 「書評『新オーストリア学派の思想と理論』」, 歴史と経済, 第184号。
- (2004b) 『ウィーンの経済思想』 ミネルヴァ書房。